

ダブルスにおけるコミュニケーション

COMMUNICATION IN DOUBLES: AN ESSENTIAL PART OF TENNIS EXPERTISE

ドマゴイ・ローシク

2005年のUSオープン女子ダブルス決勝（レイモンド・ストーサー組対ディメンティエワ・パネッタ組）でのことです。お互いに浮き沈みのある3セットマッチで、それぞれのチームの動きやショットセレクション、効果的なコートカバリングやショットの素晴らしさに感心しながら、ダブルスに必須なスキルは他にあるのだろうかと考えました。決勝戦でのプレーヤーの会話を書き留め、そのやりとりの量と内容とプレーとの関連性を問うことは理にかなっているでしょう。

優れたダブルスチームであるためには、良いコミュニケーションが不可欠であると考えられています。コミュニケーションとプレー内容との関連性について考えてみましょう。コミュニケーションに関しては、スポーツにおける人間の他の行動のように広範には研究されてきませんでした。研究者は、チームやチームとしての過程よりも、多くの場合、プレーに伴う精神面のことや個人に対して興味を示していました。チームとして機能させることを理解する上で役立つであろうチームの連携ということによろやく目が向けられるようになりました。

近年、NCAAのディビジョンIのチームの、ダブルスの試合での勝者と敗者のコミュニケーションについての研究が行われました。映像と音声で収録し、全ての会話を書き起こし、次の6つに分類されました：(a)行動に関する表現、(b)認識・確認の表現、(c)感情面に関する表現、(d)事実に関する表現、(e)プレーに関係ない表現、(f)疑問の表現。勝者も敗者も同じポイント数をプレーしており、コミュニケーションの機会も同じです。にもかかわらず、勝者は敗者の2倍近いコミュニケーションをしていました。コミュニケーションの質が勝敗を分けることに関係するかについて興味を持ち、そのパターンを分析しました。

パターンは次の2つに分けられます。「行動に関する表現に確認をする表現で応える」パターン（「センターにサーブを入れるわ」…「わかった」）、または、「疑問に対して行動に関する表現をする」パターン（「バックを狙った方がよいか？」…「そうね、バックに強い回転をかけたボールを打ちましょう」）の2つです。もちろん、他の多くのパターンの組み合わせも考えられます。

勝っているチームに多く用いられるパターンや、負けているチームに多く見られるパターンなど、それぞれにより多く見受けられるパターンがありました。統計を取ってみると、勝ちチームの方は同様でよりシンプルな表現でコミュニケーションをしており、メッセージの受け手の理解がより確実なものになっています。それに対して、負けチームの方はより複雑な表現で、メッセージのやりとりが効率的ではありませんでした。

また、勝ちチームの方が行動に関する表現が多く、プレーに関係ない表現（「明日は3科目も試験があるんだ…」）はより少ないことが分かりました。行動に関する表現はポジティブなものであり、コート上での仕事に関することです。プレーに関係ない表現は試合以外のことであり、プレーの連携や結果には何ら寄与しません。

全般的に見ると、両チームとも殆どの場合感情や行動に関する表現を用いていました（58%と27%）が、事実に関する表現や確認に関する表現は多くありませんでした（6%と5%）。感情に関する表現は、ポジティブでやる気を起こさせるなど気持ちを高揚させるものでした。ハイファイブ、背中を叩く、拍手などの非言語的行動は、感情の表現として記録しました。事実に関する表

現の例としては、「今日は風が強い」とか「このコートは速い」などがあります。「よし」「OK」「いいね」などは、認識・確認の表現です。この特別な研究は、パフォーマンスに影響を与えるコミュニケーションについて調べる新しい試みです。

これらの結果の解釈は慎重になされなければなりません。コミュニケーションの量が増えることで、チームには良い結果をもたらされるでしょう。1年間だけペアを組む大学のプレーヤー達やWTAやATPの新しいペアなど、ペアとしての経験の浅いプレーヤーには当てはまるでしょうが、ブライアン兄弟たちのように経験豊かなベテランチームには当てはまらないかもしれません。しかし、彼らでさえも初めのうちは1ポイントごとに会話をしていました。長い年月をかけてチームとして成長し、その経験から、ある場面では何をするとか、どこをカバーするとかの共通理解が生まれてきています。彼らは既に知識やプランなど関連のある情報について、幾度となくコミュニケーションをとってきているので、ほんのちょっとした会話をするだけで済みます。しかし、大事な局面で戦術を変更しなければならないときには、彼らのコミュニケーションの量は増えます。

この研究で取り上げたコミュニケーションは「ポイント間」のものですが、試合前後、チェンジオーバーの時や、ポイントプレー中（「頼む」、「任せる」等）にも行われます。試合前には一般的な戦術を話し合い、言葉を用いるかシグナルを用いるかなども決めます。試合後は、お互いの関係を長く保つために、結果にかかわらずポジティブな表現を心がけます。更には、戦術を振り返ってみます。勝った場合には、試合の良かったところや悪かったところを、負けた場合には、パートナーを責めたり批判するのではなく、楽しくプレーすることができたなどの表現をとります。

戦術などの行動に関する表現のコミュニケーションについては、別の機会に触れたいと思います。ニック・サビアノーは、彼の著書「Maximum Tennis」の中で、ダブルスと戦術に関する章を設け、より深くまとめていますが、ここでは紹介するスペースがありません。

最後に、この記事の冒頭に書いた決勝戦についてです。ディメンティエワ・パネッタ組は第1セットの立ち上がりでブレイクされ、ポイントが進む毎に、お互いが離れることが多くなりました。近づいていくことも声をかけることも殆どありませんでした。それに対して、レイモンド・ストーサー組は、絶えず声を掛け合い、ハイファイブを繰り返していました。ポイントを取っても落としても、ポイント間やゲーム間に話し合っていました。そして、第1セットをとりました。第2セットの初盤、ディメンティエワ・パネッタ組は、その試合の中で最もエキサイティングなポイントの一つをとりました。その後、お互いにハイファイブをし、コミュニケーションの量を増やしていきました。間もなくブレイクをしてリードをし、チームワークを取り戻しました。1セットオールとなり、最終セットの初盤、ディメンティエワ・パネッタ組はいくつか惜しいポイントを落とし、徐々に会話が減ってきました。それに対して相手は会話を止めませんでした。間もなく、レイモンド・ストーサー組がブレイクし、その後は、お互いにサーブキープを繰り返しましたが、彼女たちがトロフィーを持ち帰りました。

ディメンティエワ・パネッタ組がコミュニケーションをもっととっていたら勝てたでしょうか。何とも言えませんが、トップレベルのチームの行動様式や最近の研究からすると、パートナーとのコミュニケーションの質や量が増えることは、良い結果に繋がりやすいといえます。

我々は、ダブルスの戦術、フットワーク、ストロークについてはいつも触れています。同時に、プレーヤーの個々のレベルが同じだとした場合、できの良いチームとそうでないチームとに分けることになるスキルについては無視をしてしまいがちです。コミュニケーションについては、生徒にインパクトを与えることができる分野です。その質（前述）と量、シグナル、助け合いとメッセージの確認といったことが、彼らのコミュニケーションの能力を高め、より良いダブルスパートナーとなるでしょう。コミュニケーションは生まれ持ったスキルなので、それを用いての問題解決は当たり前のことです。特別なトレーニングをする必要はありません。所詮、我々は社会的な生物なのです。

コミュニケーションと連携に長ければ、大きなアドバンテージが持てます。しっかりとしたダブルスプレーヤー同士のチームの方が、シングルスのスーパースター同士のペアよりも勝ち目が多いのはこの事が理由です。他のスポーツでも同様で、バスケットボールやサッカーでも、よく熟成されたチームはオールスターチームに滅多に負けません。一般的にはスターチームに分があるように考えられますが、コミュニケーションと連携の能力によって、それぞれの力を合わせた以上のものが生まれる可能性があるのです。

【筆者略歴】 Domagoj Lausic: フロリダ州立大学でスポーツ心理学の博士号を修める。チームコミュニケーションと技術の向上に関する研究等を行う。1999年からPTRのナショナルテスターを務め、現在は、フロリダ州タラハシーのセミノール・ハイパフォーマンス・ジュニアプログラムのコーチとスポーツ心理の顧問として活動。2005～6年にかけては、ダブルスでトップ20に入り、USオープンのベスト4になったWTAのプレーヤーのトレーニングとツアー同行を行った。

【翻訳・監修】 鈴木真一： アド・イン桜テニスクール(柏市)代表 / PTRアジアプロフェッショナル (2008) / インターナショナル・テスター & クリニック / PTRプロフェッショナル・オブ・ザ・イヤー (2001) / JPTRプロオブ・ザ・イヤー (1986)